

はじめに

——高等学校国語学習指導要領における批評の位置

東 海 義 仁

「批評」は高等学校の国語教育においてどのように定義できるだろうか。

文部科学省編『高等学校学習指導要領解説国語編』（教育出版二〇一〇・六、以下『解説』）では、「『批評』とは、対象とする文章の内容や表現の仕方について、その特色や価値などを論じたり、評価したりすることである。」と説明されている。

この叙述は『解説』「C 読むこと」の「エ 表現の仕方を評価すること、書き手の意図をとらえることに関する指導事項」の言語活動例「エ 読み比べたことについて、感想を述べたり批評したりする言語活動」に書かれているものであり、批評は表現の仕方を評価する際に有効な手立てであるとされている。

『解説』には批評は書くことと結びつけられており、「批評したりするためには、思考力や想像力、表現力などが必要である」とされている。ここでは感想と批評がそれぞれ異なる

る行為であることが明確にされているだけでなく、それらを表現する手段にも差異がみられる。感想が述べることやもつことで終わっているのに対し、批評は論じたり評価したりと発展的な手段と結びつけられているため、批評は書くことで形にしてこそ批評になるといえるだろう。また、その文章の特色を理解するためには読み比べることが効果的であるため、批評する文章以外のものが蓄積されていないと困難な活動にもなりえる。

批評することの一つに評価することが挙げられる。評価するためには感想よりも客観的に文章をとらえることが必要であり、「規準や根拠を明確にする」ことが求められる。客観的にとらえるためには生徒各自がそれぞれの活動を行うだけでなく、ペアやグループでの話し合いや発表のし合いを行うなど学習の形態にも工夫が求められる。また、客観的に評価を行ったことを自分自身の表現にも生かすといったように、その評価を活用していく姿勢が求められる。

高等学校国語教科書に掲載される批評は上述の目的・方法に照らされて教材化されている。しかし、小林秀雄らの定番教材とは異なり近年の現代批評は、現代思想・批評理論・文学理論の知識を持たなければそもそもその意義や論旨を理解できず、現場でも教えにくいらしい。そのため、二〇一七年度のプロジェクト・マネージメントでは、前期では現代思想・批評理論の基礎知識を輪読によって学び、後期では実際に教材分析に取り組んでみた。本特集はこの共同研究の苦闘の成果である。

最初に高等学校学習指導要領解説における批評の位置づけを確認した。(東海)

仲正昌樹「何のための「自由」か」は自由の可変性や不由性を説くが、人々を無知化し、左派を批判し、為政者を有識化し肯定するレトリックがみられ、またアーキテクチャー論はサブカルチャーの右転回と繋がる。(西田谷)

岡真理「虚構のリアリズム」はスピルバークのリアリズムが言語化されない抑圧された他者を否定すると説くが、そこではリアリティ／リアル、虚構制作可能性／表象可能性の違いが見逃されてしまう。(須貝)

山田登世子「メディアアのテロル」は物語から情報への転換がもたらすメディアアのテロルという把握を行う際に、ベンヤミンのステレオタイプ的な参照がわかりやすい単純化と誤りをもたらしている。(黒田)

阪本俊生「ポスト・プライバシー」は社会システムの変化とプライバシーの変化の対応を追うが、氏がプライバシーの変化としているものは技術の変化であってプライバシーのそれではない。(東海)

最後に、批評と文学研究の界面である方法・理論について学会誌特集・書評・批評理論の三点から概観した。(西田谷)

(とうかい・よしひと 富山大学大学院生)